

秋

白秋全集
20

詩文評論
6

白秋全集 20

第一四回配本(第1期 一、二、四卷)

一九八六年一月七日 発行

定価 三六〇〇円

著 者 北 原 白 秋

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三三六二二
振替 東京六三三〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

『緑の触角』

童謡本論	五
童謡復興	七
童謡私観	七
童謡と童詩	三
童謡雄論	五
叡智と感覚	五
最近の私の童謡について	六
童謡制作の弁	六
「日本童謡集」第一巻序文	三
「からたちの花」序文	七

自由詩教育について(一)	三三
自由詩教育について(二)	三三
児童自由詩に就いて	三七
小学唱歌々詞批判	三五
「星の子ども」序文	三五
将来の児童教育	二六六
カルピス募集童謡の選後に	二六
童謡の鑑賞に就いて	二七
簡素な玩具	二〇六
新童謡と教育	二二
幼児と環境	三五
教育と童謡	二六
父兄たちに『児童自由詩集』のはじめ	二四〇
踏襲問題 百田宗治君に	二四三
木兎の家にて	三五
「とんぼの眼玉」序文	三七
「兎の電報」序文	三六二

「まざあ・ぐうす」序文	三六
「まざあ・ぐうす」卷末言	三七
「祭の笛」序文	三八
「花咲爺さん」序文	三九
「お話・日本の童謡」序文	四〇
「子供の村」卷末言	四一
「二重虹」卷末言	四二
「象の子」卷末言	四三
「象の子」のお話	四七
卷末言	四九

『岩波講座
日本文学 新興童謡と児童自由詩』

小 序	四九
一 新興童謡に就いて	五〇
Ⅰ 童謡復興迄	五〇

II	童謡の意義と其の開展	四八
III	童謡の諸相について	四二
二	児童自由詩運動	四四
I	運動の経過	四六
II	童謡と児童自由詩	四八
III	自由律と定型	五〇
IV	自由律の必然性	五六
V	成人と児童の観照	五八
VI	児童の生活感情と詩	五七
VII	幼児の詩	五五
	『緑の触角』再会	五五
	与田準一	五五
	後記	四八

『緑の触角』

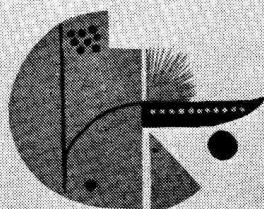


〔表紙〕

〔昭和4年3月3日 改造社刊〕

角觸の緑

育教・詩由自童兒・謠童
集 論



著 秋 白 原 北

版 社 造 改

[扉]

童謡本論

童謡復興

一

私の此の小論は、或は詩になるかも知れぬ。

蜻蛉とんぼとんぼ々々

おらちやちや(俺の母)の

乳ちちの疣いぼにとまれ

この童謡を見よ。これこそ真の三つ子の叫びではないか。無邪な愛、真の愛、真の感覚ではないか。驚くべき教智もその底に潜んでゐる。自分の最も愛慕し信頼し、日夜その飲食の滋味とする母の乳を、我以外、而も我が愛する生物に頒つて、同じその恩寵に与らせようとする心に私は掌を合せる。母の乳房は全く嬰兒にとつては天下唯一の秘宝である。その乳首の疣に留れとは何といふ鋭さか。その乳首の疣は黒く粒だつた、そして甘いべとべとしたものだらう。留る蜻蛉は大きな銀か、麦わら蜻蛉であらう。此の色彩こそ生きて動いてゐる筈だ。だから子供は天才だといふのだ。

河の神様

おら、まだ子供だ子供だ。

これは子供が夏日盛んに河で泳いでゐながら、急に小便したくなつて岸に匍ひ上ると、一人二人三人と、日に焼けた素つ裸の太鼓腹を突ん出して、並んで一斉に放尿しつゝある景を想像しなくてはならぬ。俺は子供だと彼等は河の神に向つて叫ぶ、子供の無礼は神も容赦される筈だらゐに高をくくつてゐる。彼等の此の甘えきつた無邪な自尊を誰がとがめる。彼等はまたザンプとばかり、その己れの小便の中に飛び込んで泳ぐ、水をぶっかけ合ふ。笑ひ騒ぐ。見よ、この時、潑刺として魚の如く喜戯する子供、銀の水沫、光り輝く天日！

蜂々、ごめんだ、おらまだ子供だ子供だ。とも彼等は云ひ抜ける。

恐らく腕白共は、蜂の巣めがけて手ん手の竹片や棒ぎれを縦横無尽に振り廻したであらう。仰天した蜂の一群が一度に火のやうに唸つて飛び出すと、羽織を頭から引つ被つた彼等が狼狽てまくつて逃げ出す、蜂々御免である。その子供げた愛嬌と親密さとは決して蜂と彼等とが腹からの仇敵でない事を証する。彼等は全く好奇心に富んでゐる。残虐をも敢てする。然し彼等は盛んに生長しつゝある。凝としてゐられない。彼等の身边は常に清新な生物とその生々しい色彩とを以て囲繞されてなければならぬ。彼等は真に彼等の遊び相手たる生物共を愛する、飽きる、殺す。而して愈々彼等は太る。この生長せむがための彼等の自然的激情と盲動とを強ひて抑圧しようとするのは、それこそ罪惡であると思へる。児童の天真を損ふ。何となれば彼等の行為はその刹那に於て全く善惡を超越してゐる。

猿の尻は真赤いな、

牛蒡焼いておつつけろ。

こんな酷い事も云ふ。然し彼等はその真赤い色そのものに対する感覚上の快樂をこれによつて味つてゐるのだ。

だいらう(蝸牛)によく、角出せく、

角出さねば、

お寺の鎌もつて、ちよきくしましよ。

蝸牛の角を鎌でちよきくといふこの感覚、すばらしく鮮かなこの感覚。私は曾て仏蘭西近代の詩に朝早く食用の蝸牛の角を鋏で爽かに切り落すそのちよきくを聞いた。

蛙の眼玉に針立てて、

とこ飛ばりよか、飛んで見な。

びよこ、くくく、びよつこびよこ。

浅緑色に金色の眼、その蛙の眼玉に銀色の針を突き刺す、この色彩に対する鋭い感覚、私はこれに驚く。而も此の童謡の諧謔味を帯びた自然の格調は、全く子供そのものの靈の揺すり笑ひである。蛙をいぢめるどころか、自分自身が蛙になつて、とこ飛ばりよかと揶揄し乍ら自分で飛んでゐるのだ。びよこ、くく、びよつこびよこだ。

「蛙の眼玉に灸すゑて」といふのもある。

赤い灸。それは子供が時折その母親からお尻を引つとらへられてぢりりと焼かれる。その悪戯過ぎての